湖月抄 第十

十

LICENSED PRODUCT

秘閣藏書
秘閣文庫

# 洛標

細 巻名は奇号を河内人をつくしたるまつにら
まぐくもめぐりあひぬるえやはかくるる 細 巻うは源氏
九七巻の明石うは源氏乃年廿八巻の十一月
まぐのまあり九七巻は明石乃巻の末と同年なり 巻名
廿八巻の八月をのまとまく此 四月

河清 倫亮 明 鏗鏘 日本紀

さやうよりてくまひし亭のうら浪のみとと
河二条の御ことをんつくるけ笑くまてひぞのみ
ぐ行くんと笑てるけきうとうまてはは
の浪ちうそのはいそぐ給神を月ゆは八條
し給しまの人をひさけうまけるとむ
しのやうなりしかるに紙はかわ
とりくおりまはすうらあをつるよけ人
とえうぐずはりあり年とんやこ地が
しかれど山門と院の御遺をとはひき
こし給りのひとひありあくはぐうを
るとうまひくはうちをぐしくるん

桐帝と院の帝は浪

細原の思考の通りと仰ぬ

細 紙儀殿之

細 浪

朱雀院は

宋ぞ

さやうよりてくまひし亭のうら浪のみとと
河清 倫亮 明 鏗鏘 日本紀
さぐうとくんくんくるまよ
るひ 義 細 浪をうえ
浪 二月十三日の和は義乃
うえ

いそうのをうこをうん
花 巻名巻云られは位よあり
し時あるまの布をうう
うぐとのづくれうあうれ
ぐのつこをはうう給いこまの
くそとちう古院の原は義
よををうう匂くを四日

仲秋月 細 花名貴年の御
花をひうう明 寛平元年
九月より古院光孝と義三元
うのては八條行つれうあ
ヲ氏物ぐうう伝うも義
例ありしうとうて云ヲ
花 寛平は記云寛平元年
九月甲辰依御義有被行
八講之事 朱雀帝 遷化 後
話云子 勅 ヲ 遷果行也
即位意遊猟不動此事

可謂不忠不孝甚著也云云
おほきさきの御心をさのみわろくいはんもいかゞなれば也
故門院の御遺言　細　帝ハ古院の御遺言を守りて悪くハ誰
くおもひたまへく　帝の御心に源の歎きの甚しきを悲しみ給ふ也、源
おぼしとよ。帝ハ古院の御遺言を守りて悪しくへ給ハず源氏と悪后のあ
と思ひしかば御心に添し給へる由也、かくハ思ひてもふかく思し給ふ
なりけるなり　細　何事もかのんハかなしう思す也　孟日
御しけり　孟　昔の巻にあり院の御門の又合給ふ也　細
たゞさまはえこそあらね
御むねも今はあらぬにと　細
思ふきなど御心也

おぼしけり。時しもあれやまを思し
御心もさだめなき給めれど、おほかたこゝまえ
さぐめりまじう心ばそくしとのぞひさ
しらぬこと我ありしつゝ、猶よめしけり
て、源氏の君はあらまほしき世中のこともすぐさ
つぶさにすくのことをたどしつゝ、猶世の
やうされば、この御人もあはすくらゐ
まつしきに、わりしびさてしきるかひけりね

あなかしこ。ひきこえさせ給ふ
盃　おなじく八巡之翁所となる
くらうくて　細　あいなく
八備ふしふくこゝろ
うれしくとて　河
さてとはまらなくして
どもこまかにて　師
わればらも我数もなく

花散の巻を須磨にくらべれし
さきにおもひて大后のおぼしめすら
よりくまのかたにおぼしたる人
あさましとおもふとよきえ
細　花散の巻　師日
かくぞとせし、細　此門院の御事
よの給へしぞくぎをぐいば又花
とぞあり
大后　細　帝をおぼしめすよし
あつい　盃　後漏　古后の事也　師日
つくく遠例なるかな
我世のおほすなき　花を
我命をくわうるにと　細
おもしろ　細　人くりと八
位さら給ひきよし
源をさしての給之　盃　源へ
御遺言をおぼしめす朱雀
と八おもひかけしとて
あふうらしね
細　御心さしのかきりハ
源い及さまあまりてこそ

盃　此御心をおぼしてこそと
なんの御心づからひたくおもりあるもの
しのゝめにこゝろがそげなるを
さまくるいし衰よおぼされな　朱雀之
をおもひたまへりのぐあかすのみあつ　此御事也
いまぐるよ我世のおほゆべきたる
あなかしくおぼしめしひおふるさ
みかどにさ給ひおもしろきをそ
人のおもひきのもれど　朱雀の事也
ざしけなるをさなる　細　源の事也
なん衰する所思ひろ
いわりく我ふとも、思ひてぞかなし
ちしもあはずしいさしんと思ひくるぐる

女房うちはいとあつく
孟赤面に仰勝のこと
[illegible]
細露の書き加へ
孟勝の発句をゞれる
よいやうのこともあり
ゆゑとなし

今ここでまたなん。保昌
よいやうでは
とく
ぶりあれどぶりぶりとも
細保のはるべて人
ぶりとく 仰 公羽業集
中のはるべ
なげてのうく



しそれとて。うちるこまぬ女房うちはこと
わるく白ひて。ぶぶんづりのあひぶやう
みく須をこぶきあるぶきるのつこと
もれて。後から。うとけらんぞこる。
細和歌 清子 とこぶりまてるまぶこく
わるべうこ
ちかうこをあるうれらぶぶりみこと人の
こあゆは。今こでぶてんとまふもちら
ぶやぶぶりあれぶこぶびとみこぶこ
ぶこんぶるぶ。ゆくすぶのこぶこ人のこ
孟勝のこ
ぶるよいこぶづうこうれしう
ぶるこるぶ。ぶれこるるぶなぬめる
しうこうみくぶうるこれぶ

朱雀のこ

細又左衛の保よゆう。ぶこ
のこあうし付公海の
いれぶし。ぶるも仰保
氏のはるこぶこを公ぶ
ぶこうしぶ公海のはん
ぶこんうこうしこと
勝のこ
ものひちこれぶ
細[illegible]
ちうあるこぶ仰[illegible]
ぶこ

朱雀のこ

しのこ月よこふやこうりてるこせまふよ。
公海のはるこ内海のこ
ぶこんるれぶこぶこをんこぶこ
孟分別の[illegible]
勝[illegible]
ぶるこんるこ
ぶこ。ぶぶて戦ぶのるこいこぶるこよこ
勝[illegible]
公分別[illegible]
保を公海[illegible]
ぶこ。ぶこぶこをこんひこ出てわぶる
保のこ
とべここるもいこぶこんのれこんこ
細保[illegible]
ぶぶぶぶ出ぶこいこ。ぶる
細冷泉院[illegible]
ぶこのこぶこぶこ。ここのはぶんぶこ
のここあり。十一よりまぶぶこ
ぶりこもぶるこうこうこぶこぶこで保
氏の大納これこぶこのこ
こんやこ保いてまぶゆこまで

世中ゆづり申させ給ひてと
御譲国あらせ給ひての給
ひたちせのみかど
くらゐゆづり　延喜の帝
どの御位をハ朱雀 兼平の御門 つぎ給ひて其次村上 天暦の御門
八歳年のときの御事に
て位をつぎ給ひしが後も
朱雀の御事にてふたつ
ぎなき事故相違を延喜
の御子にうまれたまへり。
大鏡云冷泉院安和二年
己巳八月十三日即位十一歳後
泉院十一歳即位是に准
ずる給
ひかりあひたると 細 朱雀 ホウサン 宝算
院太后へ申の御事
をさしてさるべき事を
さとし御位をゆづりあひて

ひかりあひたると。世人めでたきことにのゝ
しりけれど、文いでぬいつしかとうちあひてさき
こえ。おひさきみえてしつらひ給ふより
とめでたきことそこそなりけるに世中ゆ
づり申したまひてうちつゞきたまふことゝ
これも給ひしが二月の女に月日の川
宮の御ことにもありけれど。大后御譲国を御ゆ
ゆづりし給ひ
あをそとをひるさに御心にしもとの
どかなる給ひけるべきことの代をふかり
とぞ申しすぐさめ給ひて。坊の御ぜうにさ
ずでんのここちまよひ世中あらしきりて。
おさなく今めかしきこえしおはしましけり。源氏の大

坊の大后へもまゐらせ給ひてのこと
えの服若葉の下に位にけかせ給ふ
御母也ゆらせ給へるもこの下にみえたり
殺さざまりける　細左大臣
のおほいまうちぎみ 内大臣八
今の次に 左位令に
栽さる事太織冠の時
内大臣左大臣の大臣に上
りつまりける。明一
注殺とハ左大臣の大臣に是
依公兩左大臣の大臣内大臣
と云々 御河衛
ことにけさせ給ふに
細 そくしハ職をうけつぎ
職をゆづりて辞退しあり
御執政の御事にありけると
て謙退して蓼の父大臣
を摂政せられけるに
ちうじの中に 細 蓼山父之
藤原の良房より 明一 勘忠一
仁公良房摂政の例之六十三
の年齢にして不相違之
花天皇御元服の後もいま

孟明公のぬしに二条とみおちつゞきて表文梅が枝にあ
納言内大臣にまかりぬ殺さざまりてくるぐ
あもるよりけれハくもろを給ありきりや
源氏摂政し給へきとわれど辞退
がくとのをりぎとしがまきされどさや
うのことをけさそくにハさんとて。不堪とて
ちうのみじせ川ありしまでぎりゆか
ずなしまふやよひよりてぐるぬをとく 致仕の大臣の御之
しそものりておよくおいのつかりそ
ひてさうしきこともべしとうけひさア給 兼引きこ
是より異国の例などを引て摂政の事をもとめ給へ 世の政
ずぐ人のくふもしゝうり。世中さこ一ゆのこと 賢人ありとこ
のまゝにれる
ぬなりいふりさ山に給をきて給ふかな。 給を得させ

ざ幻とのけ[illegible]摂政とこれとり[illegible]徴辟の表をなくなれ摂政をあ[illegible]くあく開白と称ぜ[illegible]子
元服の後受禄の内摂政の例 八清和天皇貞観六年 仲元服ありて悪仁公良房摂政の
位を[illegible]ぬ例は准じ[illegible]見[illegible]多 仲 殺仕人 摂政の例信信元例[illegible]
くもりなく[illegible]摂政のすけ[illegible]

人のくもりなくしてうち世中をたのもしくぬりハ 何 漢高祖欲易太子宮呂恐問留侯留
侯計曰顧上不能致者天下有四人四人者年老矣為書使辯士固請宜来於是呂
后奉太子書迎此四人四人至高祖置酒太子侍四人從太子年皆八十有餘髪眉皓
白衣冠甚偉上怪之問曰彼何為者四人前對言名姓曰東園公角里先生綺里季夏黄
公上乃驚曰羽翼已成難動矣 允 此外漢家其例多 花 漢高祖戚夫人と寵ていふりて趙
王如意を太子とせんとす付呂后石ぬそきこれへて張良はよりこと問まてうと仕商山の四皓にて四人乃隠士あり皆祖めて
又まろあいてのしるべいんしもてぐらすぐれ祖りしやうとうとうふしやめ
をもぬりのべこれをたのみのこそきよせうれだ祖のまへ朝しえぐ祖
らんと張良ぐひしまりせて四皓をめてまて先をつれくる祖のまへ朝しえぐ祖
大よせぐろうさて羽翼をそてよりうこの給くる恵帝をとりこのまうま太子みてうこれぐり
しうこをつく

おさまれかしまはじろうこそもうぐ
いぐつくもとこそ海このひぐりよハ
ぬるれやまひよこびそくし給けうて
ねを世中うこうてみあしあ給うんう
うしよしぐあうまぐうぬやけまうこう

世の中をうかぐこ 殺仕人 段仕人
ぬも花みどよくつかこ
しうぐもたくこんを名の河
大后みぐのんのすなう世
ぬうしう紅葉居志ぬ
しなり
冒頭の 細 二条中ぐの姫君
勝月のあひ頃中ねのすき
めぬ中のこしまうくん
あうこうさぐうこひ
細御拾遺よあり紅梅
のをんなりを称こ
ひうこもひものをまて
梅木の果進もみこう
明梅木も果進わを
才のすをこうて
盃日
源氏の中ぐは
細作よの多きを源の
うこやこうふなり

うぐ紅人うう 細 殺仕の人の摂政もう例 ありうれぐ
辞退をうをぐし ひうて給ぐでし ざうぐうぐうぐん 殺仕人なりまふ仕をて
六十三うぐでなり給世中すさまぐこうう
ふいこまりあ給しをぐうくこれやぐ
ぬうくこと海このひぐりよハ 細 蓼上の見く
ぬうくとこれうひ給とうまて ぐうぐ中拾
権中納云よなり給の四皓のれうこう姫
ぐ十二よなり給 殺仕人 段仕人 給上間よ系うをんとう
づう給のうこうこうこうこうこうふ 叙爵をたや
ぬをうせうこうこうこうこうこうふ海なりうこく
権中納云のよ系 ぬうこうこうこうこうこうふ
よけうこうこうこうこうこうふ
いぐつくうぐ
ぬうこうこうこうこうこうふ

大殿ばらの君ハ　細 夕霧
く花中将ハ大臣と大
殿とぞひとつに給ひしど
むつましきも宮しきを
の人よりくして大殿と
いふ人の姫君ぐもとお母
を大殿といふ事ハおもハれ
お給ふ　細 葵上之舅び
のをぐよ付ても文を思
お給へ　明治のおれ時
もさる事ぞあへり
二姫君の　細 文え
事中もかへさしに
葵上の母君とぞ宮のかた
ひの時ハよくぞみじく
てうの落ぐも文をる也
ほうれど、今迄ひよ付て、ハ
悲しく思ふ給へ
われもせぬなんてつも
細 葵上ハ須磨のね給
源の沸流をぞみかわく
よまかれてこすめ人を
紙人々の給くよ給て給べ
きうすくしもとめぐくり

はらからや給ひ。大殿ばらの君ハ人より
ことよしゆくして内大臣家の殿上し給ふ。（童殿上之）
こひめ君のもとを給ひしうつくしげなるを、父おとゞ
きこえさせ給ふてあまりて若しるげなくさ
れど御くとも名ぬならでバ此御くゞの御ひ（源氏の君）
らうよろづげもてなされすぞ。こゞろれ
おしまづとつくならずさまさせてさうへ給ふな
を昔ばけんぞくへかへしてれおからふと（源の花大臣への心ぼえ）
よしうら給ふにしつゝ此ぞ君の御めれと（夕霧之）
遊さしぬ人ぐもまとゞ此の福まもでちし
ざりけるハこれさるべきこよかれつてよ
すぐ御名んしくと御しくさきつうまさへい

ひ給へ此源氏学問ともく
師となり給ふぐまた志つけ
まつべしとく
二条院にと思ひけれども
紫のうへ源の御みち人に
ろいのかんず源のめづらふ
女房と思のうへにもちおも
てり其人にし前の夕霧
のめれとさぬるべくも母
きぞちやぬとわろぞまう
をぬかみびごとなきき
こしなどハめり
二条院のひんがしなる家
細 東院と号す古院の
御知行なし故に源氏の
給ぐ給く
とまろし時なけれども
細 御母ゆづりのみの学
大義をこくろしまへるに
幷同 御師御父服をぬぎ
つとめぐ云儀の為ゆまさ
くの志をい源の給く
御勝のうつく

人がらなりめでたし。二条院にと思ひけれど
ごとまらさしけり人とおぼされたるか（源氏よりの二条院を）
御まへ見してかくわのむすめおくがりも給ひぬ（紫の上源の上人をり）
さバ中将や中務やうの人ぐ中にもかぐくよ
つけつゝなさけかはして給ひまではいと侮すく
て御ありさまも志給ふず二条院の御人
なる文殿のにまうしかすりしとふるく（院の源人内裏参之）
あしらひつゝを給ひ花ちる里などやうの（源氏まだ御ゆきたまひし人達）
御ぐすきひらくも御たんなどのさえておぐ（例の紫の上乃）
とつくろひ給はすしやかのおかしく（懐姫のうち）
しげなりしこゝいつはと見えはするゝ
時をうれども御やけもさくしいそぐしき

三月ついたち　細 玄年六月より懐妊なれば此程誕生あるべしとなり。花は三月十ケ月にあたる。孟六月より三月に入る月なれば此月あたりてやしと三月に入てやう〳〵親日にあたりしやう深切なる心なり

十六日に　細 今の月の一日にこそめでたけれとみえたり。細 女子をめづらしきさまといへり。孟 夕霧のあれどもひめぎみはめづらしきことゝ

すくえう 宿曜 孟 宿曜師・智證大師の将来なり。当時断絶なり。細 花鳥にすくえう道にて源氏の御子三人かならず帝后の勘文を申。宿曜道に源氏御子三人とは冷泉院明石中宮夕霧なり。冷泉院は源氏の御子ながら表向は桐壺院の御子なり。中のおとりは夕霧なり。夕霧は三人のなかにて劣れど太政大臣になり給ふ。但

まぎれはえ知ずを御心にかゝらひ給へざりき。三月ついたちの程にやと思ばやりしは、しやるに人しれず哀みて御つかひあり。とくかへりて十六日になん女にて、たひらかなりのよし給をつげきこゆ。めづらしきさまにてさへあなるを思ばすにおろかならず。などて京にむかへて、かゝることをもせさせざりけんと、くちをしう思ほさる。すくえうにみこ三人、みかどきさきかならずならびてうまれ給ふべし。中のおとりは太政大臣にて位をきはむべしとかんがへ申たりし。中のおとりは女にて

夕霧位相国の義相給には太政大臣と云。別当べし。又中のおとり猶劣ると云。師此事はおやの心にかけたり。源氏の藤壺の懐妊の子なれば、世の中ねもとなくしくいさぎよく、ひそかにはかりもあぬさらの子と合せたり。あまた冷泉院の源氏の子なるを思ひ、其の内に細流の説にて未だ巻にえらびとめそむかせられたるを思案にも説あり。思桜なる源氏はいまだにわかりて宿曜の勘文あし。桐壺の帝に宿曜の勘文をすでにきこしめしてあるなり。人とともに思ふや、花鳥にも又宿曜師などいへり。みかどは位をきはむ冷泉院の帝の位を三世の人相帝王の事にかなへる位よりのきびしきなりと相人のいふところにもあるなり。孟いづれもさやうに云也。さ此世のまつりごとにおもむく時に相人のことばをもちゐる事もあり。細 今まのうけたまはりひなどの時く相人のことばもちゐる。孟 当代は冷泉院の御位これぞ源の事を心よせ給へるなり。さるまのあまりこと又桐壺帝の御世にて相人のことをもちゐたまはず。孟 かくてこそ年をへ給へるなり

さてかくしておほしくしてかなふな。あまみかどさとなすさくるねよのかり世をまつりごちすべきこと、さだかにしるしおきさのさ人のそうしおかれし。とぞ世のまつりごと、すれかかりおにうつるどもこのなくてねよるるひかぬめりこと、思ひのこしうれしとおほしけるを、まづしかれてなるるをうかいざした

さく人によりて事をすげる
細古院の源氏姓を給りし
ゆゑ。古院も天子の位に
つき給ふべきはずなれども
しぎおやにうしろみもなかりし故
師源氏の身王位にハ宿世
の遠きことく
今行末のおくせい事を
細ふし方のことハ皆桐人の
よせしまたちいひしこと。今よ
り後のことそのゆくゑ
給く師源氏の御子に帝
后なるび太政大臣になる人
おんといへりしにまづ冷
泉院のくのごとく即位に
て若人の相ハおいつり。夕霧
明石姫君も太政大臣后に
なりまふつきて一定なるん
とゆゑとく
もとよりの師の占るべし
源氏を立てられ明石入道さ
へ行末のひとつ明石の君を
よめりしなり　孟　住吉明
神の利口と宿曜師の勘

文とをえて明石姫君を立后あるべしと占給之
ゆゑにこの人もよりそめてうちぬるくせまそ
ありしも住吉の神のちからなりされハ前世
道もひらく及ぶうすさきすとおもひあてられるにや
お来しひあえずれハ后にをなりさん
君ばそぎ　明石上を至まりんにまや
后にけらくしさ人も
細　明石ハ乳母などを給
べき人まらうる人ぐしと之
立后まぶべき人などハうきく
の乳母などもくハくを撰
べきこと也
せんじのむすめ
細古院に去る人の之宛
るよみさらり　記之明石姫
君の御乳つけおおねのこ
と也母も宣旨の后にと
いひける人く又ハ宮内也
宰相之
そろすきさ海みく
細そろなさき様しも父
又母などもさきさ人の
様表かけさ後ささ師
もゐふし　師そろなきさ

わりまざきさしくめぐりて。おもさのみこさ　朱雀帝の御子なく
らのなりきもぐれてらくさきりのよれ　孟前院源をいさうちおひし
がしさらどうぐ人にめぐりときて
ぢられらうをおりよずすくをとうりき
つまぶらのうくておりますと。おくまらみ　源の子とハ人の之
ひとのさうことすしねど。さう人のことひ　宿曜の勘へしるく
なしうぐひとげんのうらによがりろらい　細冷泉院之　うとどくなり
まり来のおくまじく残めぐりすとせを
よしのさきれあとんぐまこくふりのひともよ　明石よく
よかりくぐなくぬとくせめくびがくし
きみやもせびさきらきつふみやありら
ん。さらすくいうしこさすらふもおするべき　たあちそにく　細　后のうく

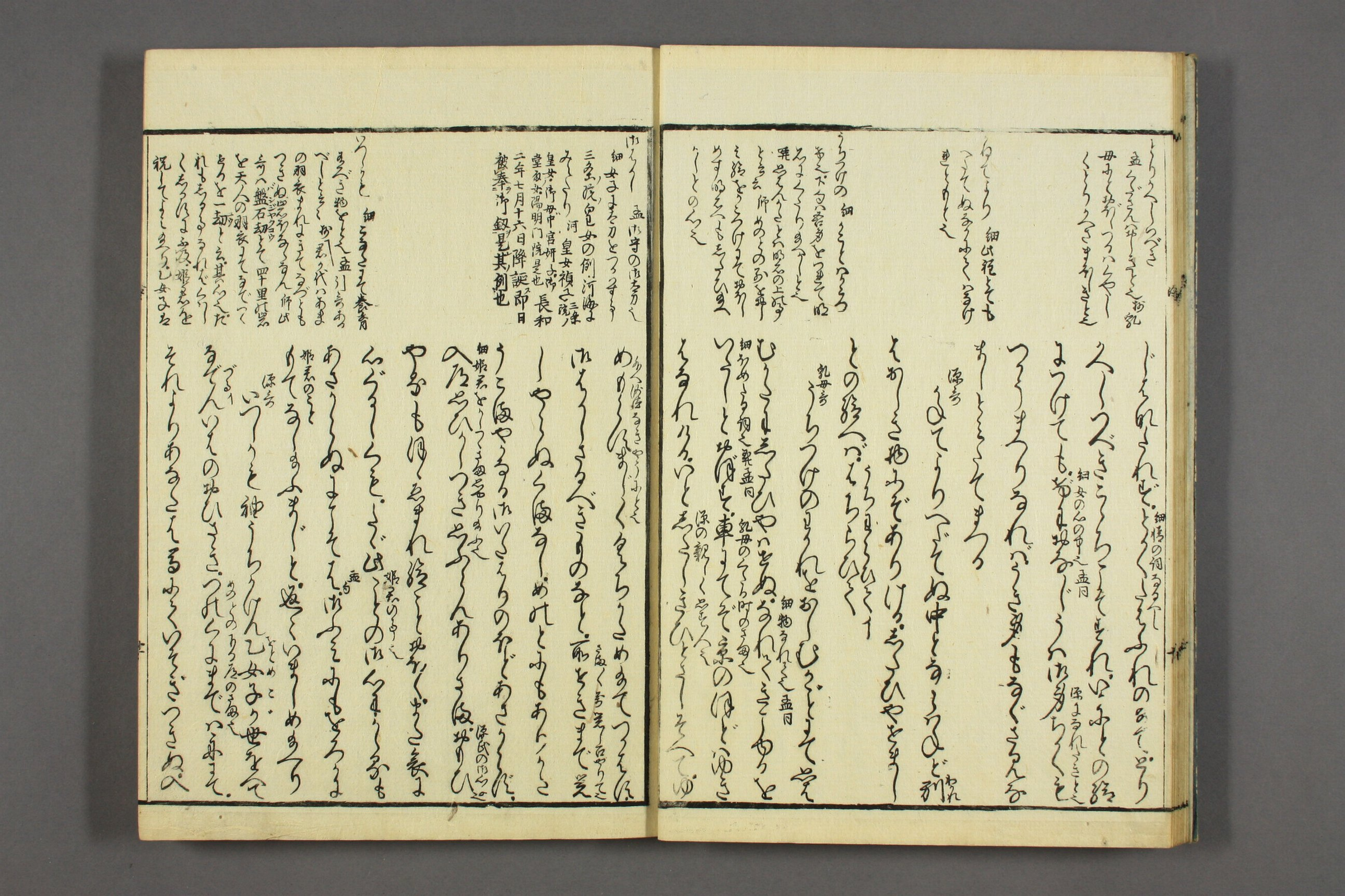
人の。おやしきをうひよむまれさらんハい　明石の田舎びたる事之
と。おりらうげうすくもあらべきられ。この
ゆくハまよひんなく
かどもぐしてせんてんとめぐりてひんぐ　二条院の之事之
の院いそぎ州くくとんさおしめりほしれ
かを給さる前にそろぐまさ人もありぐさ
りうんと見して。古院よさふろひしたんど　宣旨と
のむすめ。宮内也の宰相みそくなくなりがり　うろ女の名之　ないきやう　さいしやう
人のこなりしと。そくなどもうせて。かけろな
高世ふ人れろぐぞろなきさ海みくくみうく　あなた

然りてみるしも出来る之
さる人さがし 細 明石へやるべき
乳母をさがしの給ふ之 師 此
とよみて下しまいらせう
人してのたまはせさせし之
思ひまどはれたくおもひける
細 源のめしてみ給ふ之 明 明石
へ下すめのとの事へ此女
しる之。姫君を御ひ給
の也 師 明石の姫君此めの
とまてまかりけるを人
が何かと源氏の心か
よりうちてえひそへ之
いとをしあるまじきは
細 未だひ定めなりしを
源の兵部の御方を兼ねよ
ふかくさんを定めつる之

きこしめしつけたるをしる（源より人宮内卿女のもとへ之）
ありてことのついでにまねびきこえける
人めしてさるべきさまにの給ちぎる（宣旨）
（此女の事也之）わかくてなに心もなき人にてあけくれ
人しれぬあはらやにながむる心ぼそさ（草亭 遊仙窟）
なればふかうもおもひたどらずこの御あたり（思案もなき意之）（細 源の御あたり之）
のことをひとへにめでたうおもひきこえて
まゐるべきよし申させたり。いとあはれにか
つはおぼしていだしたて給。もののついでに（細 いだし給之）
いみじうしのびまぎれておはしましたり。さはきこえ（源氏）
ながらいかにせましと思ひみだれけるをいとか
たじけなきによろづおもひなぐさめてた

ものきこえなりけれと
かしもよくきこえけれは
織かくり乳母をいそぎい
うまつく
あやしうおもひやりなきやう
あれと 明石にゆきて姫君
と若君せうとのことまふ
ほどやりきこさするがの
姫君はのちに后にもなり給ふ
をかく源のよの事をまで
たまはせのふく
身づからを 細 源も思ひけ
ぢらもおぼえぬをとも思ひ給
しうぎやうのうへに思ひ
なくさてしかるべきさま之
うへの宮仕 細 此女のことを
師 此人内裏にしも時々
宮づかへし人なれば源の
ごらんありし
家のさまも 細 又此家は
故大臣 師 宰相にて
宮内卿 宰相の家なれ
いかにおもひやるべし

ゞの給はせんまゝにと聞ゆ。よろしき
日なりければいそがしたて給ひてあやしう（細 源の詞之）
おもひやりなきやうなれど、おもふさまこと（細 宣旨がもとへ）
なることにてなん。身づからもおぼえぬ
すまひにむすぼゝれたりしためしをおもひよ
そへてしばしはねんじすぐせなどことのあり（堪忍して也之）
さまくはしうかたらひ給ふ。うへの宮づかへとき
どきせしかば見給ふをりもありしをいたう（時よりもやつれたる也）
おとろへにけり。家のさまもいひしらずあれ（細 此宣旨の）
まどひてさすがにおほきなる所のこだ
ちなどうとましげにいかですぐしつらん（さまなれ）
とみゆ。人のさまわかやかにをかしければ（源の心也之）



明石よるづく〳〵おくりのそれハさきハひめぎみをいへ源をいつき袖さらうす明石ハ上と
九よ姫君をすぐ〳〵みすゝんとて

わらはゝき　五文の句よ言
うよそあしとわるさらし
ぶるまゝ
けゆらしきもしやよりつきさ
きこえんとありしうちハむかし
細源のゝこゝふりしつる語
もとくつりを思ひつく
あやしきぞよりそうして
若のこゝろしろ鏡もなわ
よそり　五此姫君の中ゝさ
ちとみぞれハ抱きひハ云さ
ぶと乳母んく　仰教とそ
されてゐくしくぬ而
よくさりつる鏡さも志
ぶるく
こすらの君も月てゐ
明石の上も此雅ハ源よ別
まれての抱きひさね
えくよ此度のまてりまで

落葉とりよろこびしくまりきてめてこ（源の中将ともうけましとこそ）
と泪ふしそふさよひきてとゞき咲て（五京へ向て入道の許よりそ）
ありてさき花ぞへとあふよいつきれ（源のこ　五明石の姫君を入道のれ）
しうゆそうしきまでぞあふちどのゆく（りふくろく）
きさまでうつしうゆんすうこしきのひな（細乳母の思之）
しげゆうしきはれなようしづさゆれんと
契りしるあむべすりうちとこそまつ（源）
よあやしきこゝらよいづくちて若のく
ちしつるげきとさあまうらびら何く
しうらうて笑てあつひきせこ
ゆらの君を月でうりのさのぞあひ君を（細明石の上之）

まづくわく契りしかば
居源のさ母くちかりけれ
さう拝よ侍るも云ひる
くさむるく
此後ひふも　若はいと若き
しき人ゑうさて見えもし。
めのとよつきてまいりし
此使之
ひとうして　細ちやく教
へひ入道のよしや明石上の
根うやうよはひきどんの
やまみて会此よ戸路あ
表く師此姫君と明石の
上の袖ゐうりよゐゑて入ハ
悩せくきなりしけるみし（公家り）
契りふぞくらの源の徒ら多
どを河とく六帝よ召ふ
ぞくらの袖をうれの迦之
きこそあうれ　細源の迦之
世うのるすれ何すもあふや
うふハわくさうとく既世
の習さこそあ里とく
おさこそあれとハおしよ
姫君の知年ゐゐすと京の

ていそぐまふれなるらよいきさうんとを
花くざりつるとこれはらとそその古そし
抱きひるすくさめうるすぞしらりきお（明石の上之）
て此つひふとみるさこ海のところざし
とつとぞ、ぞく気りうんといそぎさうまひれば（源の役上海といそぐ之）
あふくとぞしとこうしてきて此つげて（明石の上の返ずみ之）
ひとりおそてるすつハ袖の雅ゐるうよ契りふ（明石の詞）
づりのうけとしぞすみ川どは心ちらあや（細源の心）
志うさまくはんなうつてゆしうゆぶさ。（よつれ路より之）
女ぞうふはこしくよあいりて契さく咲（細紫上之　言之）
えあそぬとこうありつを路こともしてそと（わしときりくや文君ゑんと契之）
ゆげしてさてそあんすれおやなうゆゞ（源羽之母役あり）

紫へあはれにこそあらまほしけれどやうがいをとりかへりまゝて
あやしくわづらはしく 孟此段紫の上をとりての事也 花ちるさとへかへりかへしく
ぬるをと紫の上はかへれての詞也 花ちるさとへかへりきこしまゐらせたし
こゝにいふやうにもあらざるきんとそふり
わたくしにて 此手あらまほしけれ
とかくかくてとく紫の上に
封せて御前にすゝみてとの事
じて紀伊守よ此子あらべき
もたれねど又程の詞也
さがなくしてもおりぬべ
きことなれど
源のさがなくひがてもとぞべ
とかくするれど又子をたかふ
やらうれしきやうみを
かりひとえぞくるしきと

あやしくつゝしよ
細紫の上の詞也 此段紀伊守
との程に紀にあらずて
なり
まれまでうと思し 源氏を
やつ紀伊なるしき是ハ御つかしきれ
ん詞ぞとなり

あなかしこ 孟 任（まかせ）られたる事かなるをきこえまほしけれども けしきばかりいひなだし
あなうたてさなりや さても物あらんといふ 細紫の上の源氏にむかひての御心をいふ
あさりはいかゞしくて ものゝはかなくさふ 此子はいかにあやしきものにか
おしくうん 女めくさへあはれ お物して源の御すゑ
のちれども ゐざるでもありぬべきことを
まどさはえもいはずあさましきなりかし
よびよせてさもまたさんめくとおぼ
ありくとしてまへばかりてうちわらひて
やさしみ 孟紫上の事也 やうやう物すかなる事
人の程とはれたるものくしくとかくれ給ふ
とはいふべきようにとおもんじ 源の詞也

そよさかひて 細そもそも六
それとこそ源をおもんじあ
てるまつきそくの給ふ事
師源の詞也いかが御心の
外（けしき）ばかりおもはずしてぞ
ありけんとしておもひふし
さうなるのよかたくみへ
のこゝろあるかなと
ねんごろなるとも根
源のひとかゝり
世へいひしいて 源の
あやまちにてはさもかゝら
いかにも紫より怨（えん）ぜられ
まゐるかいなきをおほすね
ゆへりおもへとれしと
かり
と比ありてあるしと
花をよりハ紫の上にそうすと
源氏の御かたよりのぼりけり 随
師 紫の上の心也 細日
花盛のまゝにあさりて
源へ御おもむきてゐて源と
紫上との御中のゆかり
しなおもしろかれば余

よくふるまひて 細源の詞也 なさがうなりけり
わらんかりたれど ことに紀やんのかゝり
信はからずや 心をまもりて 仮名 まどはしてものさんじ
しづかにかたへいかにしそさて 孟やりかくて 漏く
ことおもふとしてあらどもひさしかりさ
こゝ紀伊しのいふやうにおそれのうち文のう
しなどかりいつものはかなくのとも
さひよこそあれどおもひやりまつ 細源の詞也 この人
とうまでおもひやりて 孟 誕生の事也 なりけるいなるたる
この給ふぞまことにしてはなしひ 孟紫の枝子
がうるえまへかくれどもの紀さしてへ 紫の上の事を
のかりかりをそくやめでし

のうれしかるべきにようくつるまで笠よりまづいかなること心あさうこと
時細の袋よりそこがつぶ〻ちりのもとをみよ
くうくうとそなたをうらもうとうのもとをみよ
まつぶさとよるとづと 細 幸こまづ紫上のあくもの給ぎきやとこ
んがくのめつうりし 細 ぬんしのさまも不うらもやといひすて給く
あれすうしゆめのうり 細 そうう年すづ方にるびうんのすうこ〻ゆのうこ琴の
きこて給ひ〻ゆのるを
どかり 花ぬん巻よ云
源氏のうる うのこひへさ
ちうちうもも不なく
なうりハ巻〻うるよるひ
ん

うれハ人すく
花ぬんちう紫のうよひ
まへうすく 仰 紫ハ給
夕源のるかをうけを給
ひ〻よ源のるとぶうの
をうみうりても紫の上
の和よ詠ふうよんとう
るひ〻うとわうくやをと

うぶ〻ら 細 紫上の奇人的
ふうその煙ハ風〻うう
ちんびうんの奇なぶうう給
よ源をく煙とうをう源をぬ
上うの中の煙〻うも秋
うをうぶ〻つへれうと
暁 うをぶ〻ちるをうとい
ぬようをうぬづをうう
仰 源のぬんよ對てよ
みをるやうに花ぬ〻うう
にうびし煙よなう〻ぶた
うれいぬひのうりよ花
うちてうをんうのうん
るよ〻やんう〻や 孟 源
何とのるふを〻紫の奇と
をうとぶりてあるうやとの
まへ
うれよう〻り 細 紫上を紫
よ〻をせをのれもうをそを
うぬぶ〻ようを法をぬれ
とく暁月 孟 源の袋人なく
ぬうるうりてうをうるうり
うをとみをうよ知ぬ

うげうて
紫
ぶ〻ちるびくうをれ〻ぬ花そうう
るれうをぶ〻ちるをう〻ぬ源
うや
源
うれるう世を海山よりめぶ〻りうをぬ
源をうをびむ分ぶ〻いぶやつぶ〻うをを
らん命〻をうるひぶをくいりのるれぶう
るうをうをるを人ようろをうれ〻とをう
もぶ〻ひうのゆ人ぶやうをぶ〻れ〻と
ぶうをうををせすをひるてぶく
のう〻をうをうをまへど〻のをぶれうりぬも
ねうをうやうもうれ給つぶ〻いとぬをう

いろのうつくしうもあるものかな　細　第上は八命にて限なるべくそれゐのつぼてきもきさうへ作いそ
いそてうてをるへん　細　第上は八命にて限なるべくそれゐのつぼてきもきさうへ作いそ
う紙のさうへぬりをてをるへん今にてやうにうへれてきつれとをちう（公義よ
そこてうしもてゆくべくれとも命にてやうにうへれとも
うのをくれさうりへんも
細　ゆゑ上の程とも給ひ
そうりうへとやひさた
まへざるへ

いちまつ　河　五月日　花鳥
の姫君三月十六日誕生五
月五日は五十日よりあるへ
紙ゆゑ十日の祝へ三月十六日
より五月日は高へ晩月

みうつくしうへうへやさのてるものさ
すがはしうへわさ高つきて、ものゑんで
きてまるがゆくあいぎやうつきてう
ぎらるへ給とおしうへうぎてうありと
ゆがて、お月さつきろう日はそいうはあうへうへと
人をれどうぞ人をてゆう義よゆが
細　ゆゑてあへぎのへ
やる給ぎてもいるひあうを風よりて
みへうれへうへう口のをぶやさう
細　ゆゑのへ
とてうりをてうぎうゆを給ひて
でをうへうのをゆがをゆをぎてをうへ

祝ひををくせも　細　給ひをぎ
よ給をゆをうへうも姫君
つのゆをへうへうを高せへ
をへ花多後者のうとい
へうゆう　仰　給の若世
うゆ姫君をうゆ紙を
地うてまうけゆへん
因縁あうゆへうり給ひ給
石のうをうをあうへゆ
をのうへうへ
給つへひをへうへ
細　八月八日よ糸つぐ
うを仰せへゆ出て
うを行や　細　海老の松
なうへへ、みうをへいな。
不変の御用へおやめい
萬蕭よりせへうへる
へは五十日よ考へうり給
思うせへへうり
をうへもうへうめをを
ゆゑの上れ上高あうへを
給のうへうめへへへ
はゆゑまうへをへ

給ひをうへ給ひをぎ
給姫君と存よへゆゑ給
とうへぎあゆへいとあうへ給ひをぎ
せもこのゆへとよつけへぐをうを給
あへとゆがうへうへ給ひをぎ
へうへびをのゆへをぎへうつけとのを
まへびゆ日よりをへうをへゆ給ひをぎ
ありへをへ、へうへうへをと。
までなり　因縁の用をを
給ひ
へうへまれへをぎへ風みへ。まへぐ
ゆをのあやめをへうりやへをぎへうゆ給ひて
細　文の用へへへ給
よりふへを
るゆをぎへうん。へんのあへぐう
細　上高れのゑ
とゆへひへ給ねをうへをうへめへを
細　をまて文の用へ

師岩の甲斐より貝をとせ
より前みも入たるひつ
くりしてすあらなく
さ海く
仏法つくし
光京よりの出てるひの
もどいやさのこれ綿よ
てあるべきさんく

盃原の平日のまでぶてせ
しびるてしてめるうるかりていろ
うひもけくりてくくくくくくくくくく
細平日の侍従く
四家みをくくくくくくくくくく
くくれば・ひれつひくいやさのよて
くくくれめびりれ・めのとこのあ
のわくれよ世よやくりをくくひべよ
てくのるびあうくるくとくくく
人もるいよれてひくてあくくれ
どくくるく世くくくくくくくくくく
のいくのるうるびめるがやくくれる
みどくくあれくれいくよあくこめくこ

細ひ乳母く
巨

細乳母よ俗性を
世くくぬもあれどくく
細仕乳母よをくくぬ人
くも寄あをく
とくくくくくる女仕
細ひきを乳人をどの出
位を・来るびてびりを
く百さ人いまれるく
なり 暁月

盃原の威光をどくくく
なり

盃面白古物語ノ教の秘
原の威光をどくくく
なり

細仕乳母をまくくあるく
くくくくくくくくくくくく
細ひ乳母をまくくあるく
くくくくくくくくくくくく
盃名上いやひあくくくく

わびれくくくくくくくくくく
世くびの乳母ひあくくくくくく
まくるの世びくくくくくくく
て限をくくくくくくくくくく
びびくくくのをどくくめくくく
のかつくぬくくくくくくく
けくやくくくひをくくくくく
くくくくくくくくくくくく
もよくくくくくくくくくく
ひのくくくよめでくくくくく
盃くくくくくくくくくくく
くくくのい紙分くくくくくく
けくれどめのくくれくくくく
細仕乳母の日よりくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
細乳母のくくくくくくくく
細乳母とくくく
細乳母のくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

うぞすゝぬ 細いつれは五十日よ五へより。早下の人く師 姫と鶴よ大のぞら人さらふれとふ人も多さき源の女御さゝるはそとひすふへくいけ存きとく殿ふつぬ身ハ秋てえまう川よ云ふ人 細 此云 上の文の御とむ意の此云上の様人々へよ不りすとるきあくつそべきに人そ於さと思も心のやえよえ去のべふかうねあ侍也 弄孟日 おもらしれやとく 細 前よ移りてハえまくすかぎきと思ふらきかひねとさう御ぞらけそや 孫く師 娘君ともうしろやとこまれいうりもひもあるし わうれとすむやらよ 孟 源の感よ謀で之 抄 女文 あがくと申後えで好たが ばずして書よ由く うらうりとう女 細 云く

此云上あり うぞすゝぬゝ御ぐれよ鳴ら川を子 といふくそみ人ぞるきさよろ川よ姫ひ ゞきんへむすゞかくありさ御とうく海 さうの此すくさめようけ給ふいのちのかど をもられくるんげようしろやとく思まへ とくわざもどれとまめやるよそこてようぞ。源氏の此云の衣すそ うらへしゝ給つ。紫の也 あられとるかやうよ ひとりでち給と女君志らめよこどこそ ひくらうとうらようてあの。細 源の御く 志のびや るよひとりぢらるがあふとぎ。細 時時ば何の云く 思かしはたに くまでとうるし給よごはてうづくり 細 宰君のすゑて紳佘あゝえ孟 此云の所なとく のそられぞや。所のさ御るじしうせひやう

まの御よりをまらぐ女のられとぶそるよつてそつる何云純叶てりぶてそいつぬとやひつめるしとせ上の君よけつり 何られとハよそ云しく云ふなるべし ましれくまで 師 それおで此云の上のるを恐くしてそよ紫とてつるるでまで云 あしおふうさく よしてそうてすぐ此給る 紫の紫のうく此すくだとけめて恐まふとく 細工膳まてもる やひぐしあさ人くうけるるどハきぐてしゝ 孟日 それハまめりとさ 孟 まほを紫の内後じてくやうにあ也バ此ふ御 まそうも此こともうと 思まよ多り くこの此んをとうら給 孟 紫の上の此ころとう まふ所よし めぐらく此同せうくる 細 花ちる里 のたまさりで のさ御くらやもくてを こうりのつく 孟 花散里 の此本性の貞んるれで ふ安てせるうるなく

ときぐさしきこのしもとれたてさひと まじくとゞうしてそこなたてすぐいる給たるめまど 根くさてしまそ。うハつくことぞうらやとゞさせ 此云の衣うの此上包弁と紫よ之 そそまつくをすふ。まなじのひとゆくつき 細 女孫も一説之 てやびごとあさ人へらうげ給るとさうれぞ ありりとせかぐもてかくこの此ころとうら給 わざよ花ちる里とかれそ給めるこそ 冬く業与く い亡おしかれ世府やけしぐもあけぐ不 源の内大臣まれ八之 をきさ此君よせはしくとぐろよそゝ人ても。丸 づしくはめ井どうくこのるさき経たし

[illegible]
ありけんひとそくまえ

そばみうらみも
細 源と其中よしあしのことを優さ
る人なれば、かへつてうらみ給ふを
かり 花散 花散は源の御
心ざしみをそへてあはれよりおぼえ
されども、夜さりよりかよふ
らひまうでも風流もなく
恨みもつゆしかりけるにてさ
らぬ也

月おぼろにさし入りて
五月雨のころなれば月の
さやかならずおぼろなるべし

づめ給ふなりけり。五月雨(さみだれ)のつれづれなるこ
ろ、おほやけわたくしものしづかなるに、
おぼしおこしてわたり給へり。(花散の御方へ)よそなが
らも、あけくれにつけて、よろづにおぼし
やりとぶらひ聞え給ふをたのみにて、すぐい給
ところなれば、いまめかしう心にくきさ
まに、そばみうらみ(うらみ)給ふべきならねば、
心やすげなり。(花散の御方の心やすき也)としごろにいよいよあれま
さりすごげにておはす。(細 麗景殿の女御也)女御の君に御物
語きこえて、(細 花散里のことなり)にしのつまどに夜ふかしてさ
しよりたまへり。(源の御事)月おぼろにさし入りて、いと
えんなる御ふるまひつきもせず見え給ふ。

いとゞつゝましけれども
ちかう 細 花散里の
ことはりさ〔ま〕みえ〔たり〕
盃源の御心の付ともし何とな
してもかへすぐす 細 いとち
く花散の御事をしのぶ源の御心を
しても其の夜をあくしむ 細
あてつらねたしき
なかなかは 細 花散里の
みえたる優さまく源のとひ
ますを月にたとへしるなり。
畢竟の言葉は外の人々
るも盃源同。細 水鶏の
一字は奥ゆかしさ
なりしぞ
とうさく 細 水鶏まそ
なべて 五百十 たゝくゝゐなのいま
も此人もあらはるべきものぞ
とくしらく女と思ふ心
まいらるれ九さいかの御
じき女と奥へいひのぶるを
御うへの心ありとは我から
此人もあふべきやと
さはれなく

いとゞつゝましけれど、はしちかううちながめ給
けるさまながら、のどやかにてものし給ふけはひ
いとめやすし。くゐな(水鶏)のいとちかうなき
たるを
(花散里)くゐなだにおどろかさずはいかにして
あれたるやどに月をいれまし。いとなつかしう
いひけちたまへるぞ、(細 源の心に所 紫上明石上花散何も捨がたき)とりどりにすてがたき
世かな、(かゝるこそ)かゝるこそなかなか身もくるしけれ
とおぼす
(源氏)(おしなべてうちうちかよふ心)おしなべてたゝくくゐなにおどろかば
うはの空なる月もこそいれ、うしろめ
たう、とはなほことにきこえ給へど、あだあだし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天皇八持統天皇ニしてまた女帝也東三条院延喜以後の例なれど今の清雲院
のそなたに持統天皇の例なり東三條院正暦二年七月一日院号依為国母也
とゝぶせよとぞうりて　朱雀院の御代よ二条の太政大后ゑのもとうりうぶ
座八世よ悔うて四裏のお入もとゝく冷泉院ともえんなりまでなりまでなりまでなり
ゆくゝはゝとゝよれゝ　悪后
細　悪后八保をゝよゝゝ
ゆ思ま太保八ゝうて后
よゝをゝせつゝまう
まゝゝ
人もやそゝゝゝゝ
呼悪后のゝをせ人のゝう
らんゝうゝゝ保のゝゝせ
ゆゝゝゝとゝゝゝゝ保てゝ
細世ゝゝゝ八定めなきゝり
なゝゝとゝ后のあまりゝう
まゝであゝゝをゝゝ保の
ゆゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝ
ゆゝゝのゝゝ　細　保の公大
ゝゝの　ゝゝゝよ八ゝ近の御
ゝゝの根ゝをゝゝゝゝゝ
ゝゝ白悪ゝ思八ゝゝゝれ
ゝ　ゝ　ゝゝのゝよ八ゝ
御のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まで給もいゝめてゝゝれゝ八ゆゝゝゝゝ
友達保の御威勢ゆゝゝれぬゝゝ
いゝゝゝゝのゝ世ゝゝゝゝゝ
保氏ゝ
ゆゝゝゝゝよゝれて悪后いゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

系図よみ〜おの氏中元八公のいりく〜と
へし元中の元とこれど今一人い系番ものこれば同腹のいりく〜と
ゐなし仰公の上八按察使の大納元の妻の腹なれ別腹なり
地ぐ八人ありまくりゐ
なりとと
いぐ〜給りんとすん 紙 元の女房の中ゆ也 仰 ゐるの例く保氏元俊執しまぐ
元の状をみりしよ 細 保元八年の状也 波戸ゐく風雨れ門の孔とくく保元物
侍堂殿の例と換をるゐ同付のまとゐ 時盃同
給孔ぐ

まそこくく八 細 年くく八
年の始よ 仰ゐるとを年
の状と年の表八懐姓に
ゐて手紙梅急なり
遊引ゐく咋今給くゐ
也ゆ上のゐも 時盃

ぐくくとゐくく 紙 十列
紙 今源拾改給ゐる石
具給ゐくく 東後の舞人
よみくくゐ元ゐ
十人くゐるよ元て装束いわを
ぎりくくゐ物を見て神社
の行幸関白の装束元日
給年ぐ元めりくく社ゐよ
て来まぐく舞て其後ゐ
ゐ場ゐてゐをするゐ
ゐくよのゐ元右近衆の
官人元をつくむ八幡殿付
衆元ぐよ八廣元元客舞
人くゐり
元くぬ人も 細 世中ゆを
ゐくゐゐ八をゐぬ今
ゐくくく
ゆくゐあゐ元ゐのいゐゆくく
及ゐくくくくくゐゐてゐゐ
ゐ分のゐぐ口ゆくくくく
くゐ年くく ゐくくにゐ
ゐくゐゆをぐよ保ゐくふ
ゐをゐのゐゆくくゐ

給ひよの 保の拱奉のくく
んぐゐくゐをゐてぐけくゐぐ人くを
ぐくゐ元ぐくくを網へくくゐをゐひ
くくゐ 細 年くくゐゐゐ元ぐくくゐるぐをゐゐめれば内
大臣殿の 孔ぐ
人もあり 孔ぐくくゐよくくぐゐをゐぬ
ゐくくゐ 細 ゐくくゐの上のくく
月日をゐ
ゐくゐくゐゐくくゐゐくくゐゐくゐゐくゐゐ
ゐくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

近来府生名一人近来名三人為随身祖停童子云云今案ニハ随身ハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

れぬ物・そこらの細ろよハ
くれて雑仕とゝ
面よりにしれり。ゆゑ
よ位殿一門の家ゆけさ中も
とくざうとく 孟義とき
れい面よハれぬよ武徳宮
のゝたくゝゆゑ上よりそ
なりくゝうにたゆ
てのうちもれど義衣の事
ゆくゝ田義とゝの事よハく
れぬとゝ源の事ゝ
されどそやありゝそゝ
細源のゝ上ゝ
投松女よ月とゝ
ゝ殿て大ゝこの世れ人のこ
とゝとゝひゝゆゝりゝ殿ゝも
人ゝゝゝりゝてゝそゝ
もゝゝれゝ 晩孟月
ゆのゆゆゝゝゝよ
細ゆのゆゝゝゝゝよ方
のゝゝゝゝハゝ
殿ゝゝもあゝく嵯よハ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて殿松女ゝゝハ

のく殿のゆゝくゝれゝ細ゆくゝのゝ殿通ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新ありてを母親のなさ
いとうるさくもあるとも
ゆとりてほそきの作
人よりゆるいふりをさ
[illegible]

[illegible]
細ほのゆよし作てく
つくく笠にてぐしり
の姫紫もあべこと
あらぐさかくしやうら
もどつ
ほの糸えり 毛おやあ
うんとかり

[illegible]
細帝男みくも知伯と
師 女八疾妬みでのす
てぐこりの地ひを
もろ物でとぶ息布の茶
しろるわるこ
いそさろこれ 文付文(紅

えんとれんそまくようしろめうなこ
ぬし作をるぐこうてをまくいとうること
[illegible]
[illegible]
てこもぐるんぐこ女やるれめうは
いく表なうこよこそ作りれまてやを
りんめうこむよつけくもあらこさやこ
うこやうしまぐこんよこうもまうれ
こむこうこてあうこひやうぐこうれどけて
さやこれいこうをぐよやりこうれ
こうこ男をうこ作るみも女いをひのやう
めてこうのやりひとをこうやまうん作
これいらぐこうこをとりてこうれて

[illegible]
ほのこんをてほのこうこ
ほうこ女をこまくかさ
[illegible]
細ほのあ
ぐまこうこれ思ぐ
こうのをこ
こ女をこ
ほのを

[illegible]
細ひこうこ
ぐめひまくこ
こうこりの作れと
こうこ思ぐこうこ
こうこのをこ男の
こうこ女をこ作
こうこんこうこをのぐここ
[illegible]
ほのこ
こうこうこいやうこ
こうこ
こうこ
こ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やうくれんちのまり給
そはいそうしも
斉美まくはちんじゃさ
をとうそをかすあしし
今は源へ亜るはをまを
あるく
れめしをで
ほよんつてれやまを
うはいうでけをそ
秋美よるくむうく
ゆうそれ　細源泉和
さそそをとうまひつ
んしも　作　美亜秋美
とはよをひ給しうばめう
はうでれ日公竟より
まをも斉美の宿を
又給しんとうれしく
ゆひやりまふしく
ふれとはをの者ふをれ
とうくをの祈　奇よ
はやうをく
をしをのく　細ゆうつて
をとはみびをのを　作　服者
はをんのをつけをを入位あり

つをまをうをひうをを給やうくれんをびま
つををくはをづくもはをうをでををく
秋美のをまく
つをまうをばしれをはめををを
をうあれしををのうををををうをり
をうゆをををれうををれををゆをいう
第月はのをををれうををれををゆをいう
よ美のれをうををををををををよ
秋美
らんをりひやりゆををををををををを
ほのく
まれをうをををををををををををを
細源のを給
んどをんをををををををををををを
ほうう
をうをををををををををををををを
秋天翔をうう
まうけををんやどをれをををををを
をの文
ををれををををををををををををを
秋美のをく
をををををををををををををををを

をををををををををををををををを
盃　作　美のをく
をををををををををををををををを
人のれめをををををををををををを
美のをを
をををををををををををををををを
をををををををををををををををを
秋美をを
をををををををををををををををを
をををををををををををををををを
ををををををををををををををを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山寺のへね
花今来とれえ来山の
るれ徒しうへ

奇文帖と題して
四離庵の閑叔子の例賢本
れ巻よりうつり

[illegible]

[illegible]

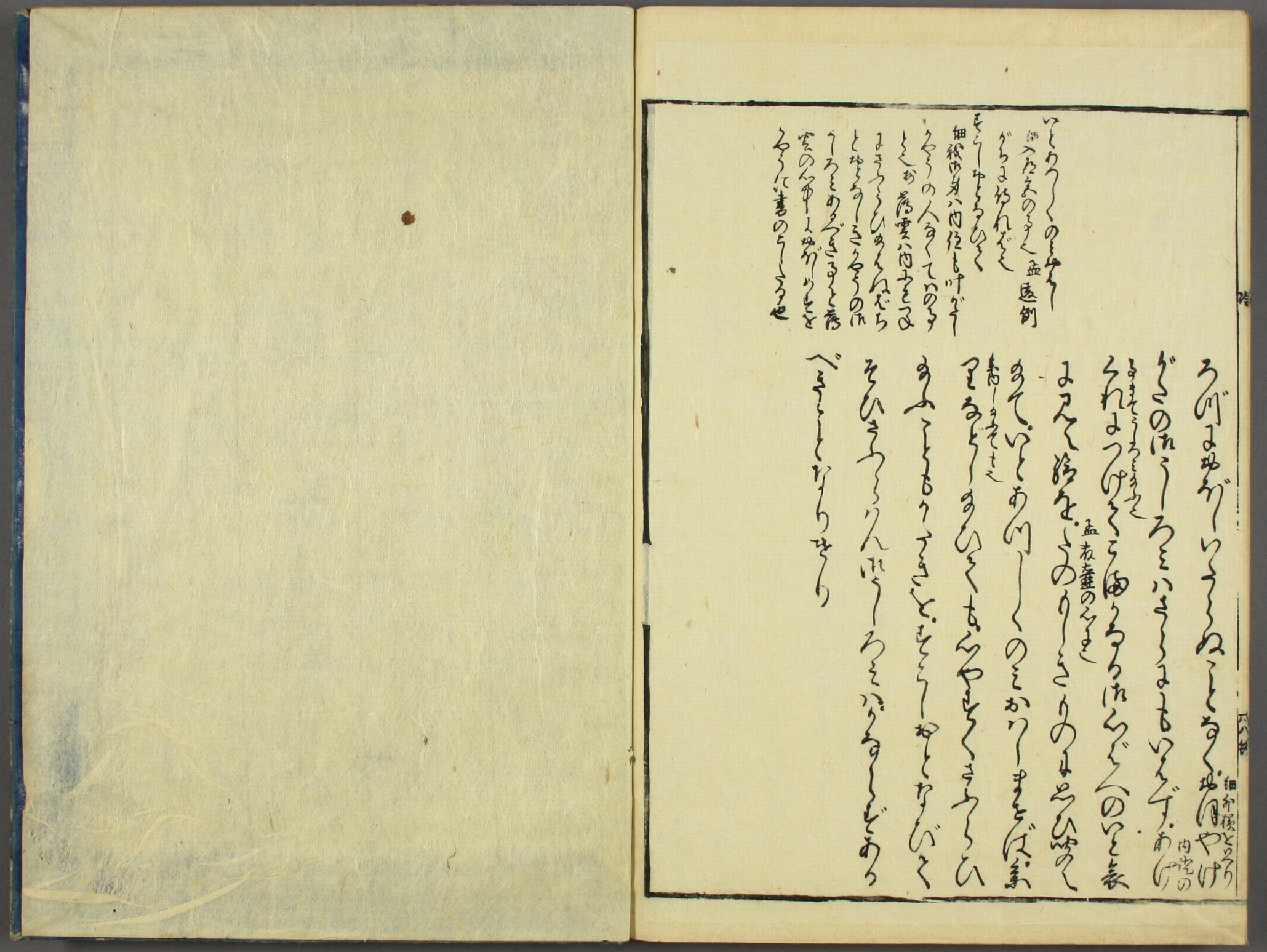
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]